

被援助者人数と実体性が援助意図に及ぼす影響

ハン ショウグン

(学籍番号：20PSM203, 指導教員：田中知恵教授)

問題と目的

寄付ジレンマとは、被援助者が増えるほど援助意図と同情が低くなる現象である(Small et al., 2007)。その原因について、Cameron & Payne (2011)は、被援助者が多いほど、援助コストが高いため、同情が制御されるという同情崩壊(the collapse of compassion)理論を提出した。

しかし、Cameron(2011) たちは実験参加者の援助意図を測定しておらず、現象のプロセスに関して検討が十分ではないため、ハン・田中・藤浪(2021)では、受け手の援助意図を測定し検討を行った。その結果、援助要請がある場合に、10人条件では、感情改善能力が高いほど援助意図がより高かった。援助要請がある場合に、感情改善能力高群の援助意図は、10人条件が4人条件より高かった。これは先行研究とは異なる結果であった。

その理由として、被援助者の実体性(entitativity)が受け手の援助意図に影響を与えたと考えられる。実体性とは対象がひとつのまとまりとしてみなされる程度である。Cameron & Payne (2011)の多人数条件では、被援助者の写真をひとりずつ8枚同時に、参加者に呈示した。他方、ハンたち(2021)の研究では、10人の被援助者が一緒に並んでいる写真を1枚参加者に呈示し、被援助者の実体性が高く参加者に知覚された可能性がある。実体性が高いと被援助者に対する評価がより極端的になるという知見もある(Smith et al., 2013)。ところで、気分一致効果により、気分の良いときには物事の良い面が、気分の悪いときには物事の悪い面が見えやすくなる(Mayer et al., 1992)。感情改善能力高いと、否定的な気分になりにくい、被援助者に好意を持つ可能性がより高い。そして、被援助者の実体性高い場合

に、感情一致効果を強めて、感情改善能力が高いほど、援助意図が高くなる可能性がある。本研究では、被援助者の実体性を実験的に操作し、援助意図に及ぼす影響を検討する。

具体的には、7名でも別々の写真で呈示する場合(実体性低条件)と7名が一緒に写っている写真を呈示する場合(実体性高条件)を設ける。またこれらの条件と比較するために、1名条件を設ける。

実体性高条件では、感情改善能力高いほど、援助意図と同情がより高いだろう。実体性低条件では、同情崩壊理論より、感情改善能力高いほど、援助意図と同情がより低いだろう。感情改善能力高いほど、実体性低条件が実体性高条件より援助意図と同情が低いという効果は、より認められるだろう。また、1名条件は実体性高条件と同じパターンになるだろう。

方法

実験参加者

参加者は、都内私立大学の学生118名(男性21名、女性97名)であり、平均年齢は20.33±1.01歳であった。

実験デザイン

写真条件(1名・実体性低・実体性高)×感情改善能力 どちらも参加者間要因であった。

手続き

援助要請メッセージを読む前に、後で寄付金の額を回答するよう伝えた。その後、写真と寄付のメッセージを呈示し、測定項目に回答を求めた。

実体性高条件には、7名が一緒に写っている写真1枚が呈示させた。実体性低条件には、被援助者の写真がひとりずつ7枚同時に、参加者に呈示させた。1名条件には、実体性低条件の7枚の写真のうち、1枚がランダムに呈示させた。

結果

操作チェック

t検定を行った。その結果、実体性低条件の実体性は、実体性高条件より低かった($t(74)=5.43, p<.001$)。

同情

階層的重回帰分析を行った。

その結果(Table 1), Step 1における決定係数は有意な傾向であった($R^2=.060, F(3,114)=2.38, p=.069$)。実体性低条件の得点が、1名条件($\beta=-.26, p=.016$)と実体性高条件($\beta=-.21, p=.057$)より高かった。

Step 1からStep 2にかけての決定係数の増分は有意な傾向であった($\Delta R^2=.038, F(2,112)=2.38, p=.097$)。単純傾斜検定を行った。その結果(Figure1)、実体性高条件のみ、感情改善能力が同情に与える負の影響が有意であった($b=-.18, p=.02$)。実体性低条件($b=.06, p=.49$)、1人条件($b=.001, p=.97$)には、感情改善能力が同情に与える影響が認められなかった。また、感情改善能力高群(+1SD)において、写真条件の単純主効果が認められた($F(2,112)=4.56, p=.01$)。実体性低条件の同情は、実体性高条件($b=-.27, p=.004$)と1名条件($b=-.18, p=.04$)より高かった。感情改善能力低群(-1SD)において、写真条件の単純主効果が認められなかった($F(2,112)=.98, p=.38$)。

援助意図

階層的重回帰分析を行った。その結果(Table 1), Step 1における決定係数は有意ではなかった($R^2=.005, F(3,114)=.20, p=.40$)。Step 1からStep 2にかけての決定係数の増分は有意ではなかった($\Delta R^2=.021, F(2,112)=.93, p=.40$)。

同情と援助意図の関連

援助意図は同情との間に弱い正の相関が示された($r=.29, p<.001$)。

考察

同情の結果は、仮説と逆になった。実体性低条件の同情は、1名条件と実体性高条件より高かった。写真刺激の影響があると考えられる。

実体性低条件の写真は、構図とサイズが証明写真みたい。子どもの顔が大きくて、画面の真ん中になるため、注意を向けさせる傾向が高い。

子どもの援助を望んでいる表情を見て、感情を喚起しやすい可能性がある。

次の研究には、写真の代わりにイラストを実験刺激にして、表情の見えやすさを統制し再度検討する必要がある。

Table 1. 階層的重回帰分析の結果

独立変数	同情		援助意図		
	β	step1	step2	step1	step2
写真条件 1	-.26*	-.11	-.00	-.29	
写真条件 2	-.21†	.38	-.05	.45	
感情改善能力	-.10	.10	-.05	.12	
写真条件 1×感情制御能力		-.15		-.30	
写真条件 2×感情制御能力		-.61*		-.41	
ΔR^2		.060†	.098†	.005	.021

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$, † $p<.10$

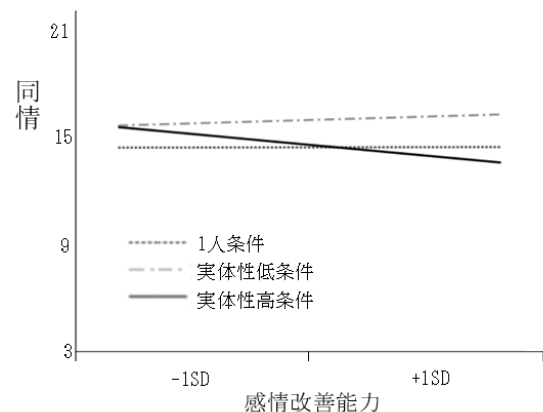


Figure1. 感情改善能力と写真条件の交互作用効果

主要引用文献

- Cameron & Payne (2011). Escaping affect: How motivated emotion regulation creates insensitivity to mass suffering. *Journal of Personality and Social Psychology*, 100, 1-15.
- ハン ショウグン・田中 知恵・藤浪 遼太郎 (2021). 被援助者人数が援助意図に及ぼす影響 日本社会心理学会第 62 回大会発表論文集, 604.
- Smith, B.W., Faro, D., Burson, K.A. (2013). More for the Many: The Influence of Entitativity on Charitable Giving, *Journal of Consumer Research*, 39, 961-976